

総科体験入学

「大学生をやってみよう—総合科学部1日体験入学」について

コース委員長 永井克彦

11月始めに、広島大学統合移転完了記念事業が行われ、全学的に行う事業とともに、各学部が主催する事業の2本立てで行われた。総合科学部では、コース委員会を中心に昨年来から総合科学部主催の記念事業の計画を立て、学部公開と1日体験入学を行うことにした。1日体験入学は、当時、全学の「移転完了記念事業委員会」の「記念式典・祝賀会部会」の部会長をされていた戸田前学部長が是非に勧められたものである。本年4月からは、コース委員会の中に「統合移転完了記念事業実行小委員会」をもうけ、具体的な検討を行ってきた。

1日体験入学については、社会人、高校生に、総合科学部で行っている教育研究の内容について関心を持ってもらうことを目的として、内容の計画を立てた。そのために、全体講義として、理系、文系からの2つの講義を用意し、その後各コースで10人程度ずつのセミナーを行うことにした。各コースからの提案をお願いして検討した結果、全体講義としては、宗岡先生の「行動の神経生理学」と品川先生の「環境危機と倫理学」を行っていたことになる。また、体験「入学」の形式を整えるために、入学式、卒業式を行うとともに、時間割も出来るだけ現行のものに近い形にすることにした。

8月末には、具体的な計画ができ上がり、社会人、高校生を対象に80名を募集することとなった。総合科学部庶務係の事務官諸氏の努力で「大学生をやってみよう」というポスターが出来上がり、「飛翔」編集部学生の編集員のイラストの協力も得て、内容紹介のパンフレットも出来上がり、9月下旬には、東

広島市、広島市周辺の公共施設にポスターの掲示をお願いした。当初10月18日を応募締め切り日としたが、その段階では、応募者が少なく、少々心配した。しかし、その後何人かの方に周辺の方々への宣伝をして頂いたり、ラジオの行事案内で放送してもらったりした結果、最終段階では、問い合わせは100人を越え、一部はお断りせざるを得なくなり、結果的に85人の方々に参加していただくことになった。参加者は高校生から67歳の方まで広く分布しており、主催者側の期待に添った結果になりよかったと考えている。ただ、参加された方の中にも、この企画は知人に聞いて初めて知ったといわれる方もおられ、宣伝の仕方にもう一つ工夫が必要であったと思われる。

当日(11月5日)は、前もって事務官の方々が清掃して下さったK棟の教室で行った。大学祭と重なっていたが、他の行事の影響も少なく、講義、セミナーともに順調に行うことが出来た。内容については、後の紹介記事をご覧いただきたい。講義、セミナーともに評判がよく、アンケートを採ったところ、時間が少ない、来年も引き続いてやってほしいという主催者にはうれしい意見が圧倒的だった。

総合科学部がどういった教育研究をしているところかということを知ってもらうために、この体験入学の形の学部公開は最適の形であるかもしれない。今後はもう少し主催者側の肩の凝らない形で、かつもう少し内容を濃くした形で続けていったらよいのではないかと考える。

最後に、この企画にご協力いただいた方々に改めて感謝の意を表したい。

入学式

講義1「行動の神経生物学—心は本当に自由か」
講義2「環境危機と倫理学」

昼食

コース別セミナー

人間文化 「哲学」「倫理学」教育の(無)意味
地域文化 日本の歴史・地域の歴史
社会科学 非日常生活のなかの法を考える
外国語 異文化の世界—西洋と日本
数理情報 インターネット体験セミナー
物質生命 クリーンなエネルギー「太陽電池」
自然環境 森林と人間
生体行動 人間と集団

卒業式

体験入学は左のような日程・内容で行われた。飛翔委員はこの日の講義・セミナーに密着取材し、永井先生や庶務係の協力で参加者の感想・意見などのアンケートも実施することができた。以下は、その結果も踏まえて後日行った、各担当教官へのインタビューを含めたレポートである。今回のこの試みの意味と成果は、どんなことにあったのだろうか。



教官へのインタビューではアンケートの結果に基づき、講義・セミナーを行ってみたい感想、またその狙い通りにいったのかなどを質問して、その後、生涯学習をキーワードに広く各教官の意見を求めてみた。

講義1「行動の神経生物学—心はほんとうに自由か」宗岡洋二郎教官(生体行動科学コース)

今話題になっている『ソフィーの世界』という哲学の本の中で「あなたはだれ」「どこから来たの」という問いかけがなされるが、生物学的な結論から言うと、私達は1個の受精卵が発生・発達してできた分子機械であり、それは有機物の中からたまたま単細胞生物が生まれ、多細胞生物になっていった偶然の進化の産物であると考えられている。したがって、普通我々は自由意志を持って行動していると思っているけれども、生物学的にみると単なる分子機械に過ぎない。この「自由意志を持った機械」の不自由な面を系統発生的、個体発生的に見ていくことで問題提起としたい。

一見意志を持っているように見える動物の行動も、現在では物理化学的な反応によって機械的に起こることが知られている。例えばゾウリムシは細胞のイオン濃度で繊毛の運動が制御されるので、環境を操作すれば亡骸を行動させることができる。コオロギの生殖行動はあるペプチドホルモンの注入によって引き起こすことができるし、カエルの摂食行動

は特定の神経部位の電気刺激によって再現できる。

カモのヒナは生まれて初めて見たものを親と思ってついていくという刷り込み行動があるが、これは生後5〜24時間でそういう反応を起こす神経系ができあがるためである。刺激を与えなければこの臨界期はやや延びるが、ある程度以上になると刷り込みは起こらない。例えば人間の言語習得の臨界期は12歳位だと言われる。ただし、早い内からいろんな知識をつめこめば、それだけ早く頭が固くなるとも言える。

マウスの脳の報酬系と呼ばれる部分に電極をつなぎ、レバーを押すと電気刺激されるような装置を用意すると、マウスはその刺激による快感を求めてひたすらレバーを押し続ける。これは人でも同じで、何かをして気持ちいいとか楽しいというのは、結局この報酬系の快感を求める行為である。

ヒトの脳は左右に分かれていて、脳梁という部分でつながっているが、これを切断した分割脳患者の研究から、左右で違う考え方を

する事がわかってきた。即ち人は二つの心を持つ。多重人格はこれから説明されるが、それには幼児期の心的外傷が大きく関わっていると考えられている。またこのことから、脳の損傷による人格障害・記憶障害を持つ人による犯罪の責任をどこまで問えるかという法的問題が起ってくる。

以上のようなことから、現在の教育制度、社会制度等に対して、自然科学の知見を基に考えていくことの必要性、またその意義は大きいと言えよう。しかしそれでも、あまのじゃくな行動をわざとやってみたりできることからして、私たちはやはり自由意志を持っていると言えるのではないだろうか。



宗岡先生インタビュー

— 講義を終えての感想を

「うん、まあ、時間がなかった。最低2時間は必要だった。まあ、あの手の話は好きなんです、いやいやというわけではなかったけれども。内容は、高校生ばかりだろうと思って、文系向けにやっている講義を縮めたみたいなもの、理系の専門基礎ではない、もっと包

括的なかたちで自然科学の人間像を話そうとした。基本的に人間は自由意志を持った分子機械であって、その機械の不自由性というのは幼児期に……」(講義を再開する)

— 参加者の感想を見ると、エンターテインメントとしては成功だったようだが……

「あれをエンターテインメントと言われたら(苦笑)それがテレビ世代の感じ方なのかな。あれで言おうとしたのは、例えば今の現代人の生活というのは生理学的には……」(講義を続行する)

— いえ、社会制度や教育などを生物学の知見を視野にいれながら考えるという問題についてはあまりふれることができなかったのでは、と

「それはもう時間が少ないから。こちらが事例を提示して、それを元に考えてもらえばいいわけで、本当は討論でもできればいいのだが」

— 総科の宣伝も随分していましたか
「別に義理でも何でもなくて、本当に素晴らしい学部だし、どうせ広大に来るんなら絶対ここがいいから言っただけで。講義のなかで言ったようないろんな問題をいろんな側面から考えられるのはここだけでしょう。しかし今のままではまだダメだ。もっと先生たちががんばらないと。それに若い人たちがこれから手探りで新しい分野を組織して本当に総合科学をやってもらいたい。」

講義2「環境危機と倫理学」品川哲彦教官(人間文化コース)

環境は常に、その中心にいる「だれか」にとっての環境である。自然という言葉では、その「だれか」による影響や価値判断を、自然に起こったこと、当然の判断として片付けてしまいがちになる。そうではなく環境への影響、及びそれに対する評価は中心の「だれか」によるものであることをはっきりさせるために、ここでは環境という言葉を使う。

環境問題においては、自分の行為が何にどんな影響を与えるか、そしてそれは良いのか悪いのかを考えることになる。そこで行為の善悪の根拠、そこに関わる権利や責任の問題

を考える倫理学に関係してくる。

ここで、倫理・道徳というのはある仲間内のルールであり、行動規範である。しかし倫理学は、その規範における善悪の「判断の根拠」を問い、理由を明示しようとする。したがって環境倫理学では「なぜ環境を守るのか」を問う。

現在の環境問題は、第一に加害者と被害者の距離が時間的・空間的に遠い、第二に原因と結果の関係が複雑で特定しにくいということから、加害者にとって被害者の顔が見えにくく、単に人に迷惑をかけるなどというような

道徳を適用しにくい。

道徳規範を守る理由付けには大きく二つある。まず人間を越えた存在によるもので、神や精霊に対する畏れから道徳を守るというもの。次に人間同士の関係によるもの。これには道徳を守らないと社会秩序が乱れ、結局自分が損する(ホブズ)、人は皆苦しんでいる人に対する共感の念を持つ(ヒューム)、人は他人の自由を侵害しない限りの自由を持つ(カント/J.S.ミル)、最も多くの人々が最も大きな幸福を得るべき(ベンサム)といった考えがある。

さて、環境問題に対しては、道徳規範の適用される「仲間」の範囲を拡大し、遠い距離にある被害者の権利を守ることで環境を保護しようとする考えが生まれた。これは基本的にXにAする権利がある場合、Xとは違うYにもAする権利がある、というステップを踏む。具体的には、これから生まれてくる人間に対して現在生きている人間と同じ権利(資源を使うなど)を認める未来世代の権利論、動物に人間と同様の権利(苦痛を避けるなど)を認める動物の権利論、さらに植物や土地、生態系そのものに権利を認めようとする自然物の権利論がある。こうして同じ権利を持つ主体を拡大することで、「現在」の「人間」の行為を規制しようとする。

最後にこのような講義を大学でする事の意味を考えてみたい。以前は大学への進学率は低く、そのいわゆるエリートは尊敬されたりいい職に就けたりという利益があったが、40%近くが進学する現在は必ずしもそうではない。むしろエリートが占有していた知識やその責任を、一般の人々も共有し考えることが求められるようになってきていると言えるだろう。

品川先生インタビュー

— 体験入学での講義を担当するにあたっての配慮、終えての感想は

「年齢層が幅広いので対象をしぼるのに苦労した。比較的高校生が多いので、高校2年生程度にわかるように考えた。具体的には話の流れをはっきりさせる、難しい言葉をや



さしく直すなど。昔の予備校講師時代を思いだそうとしたが、だめだった(笑)。学生以外の人に聞いてもらうことで、逆に普段の学生に対する講義のチェックにもなったと思う。学生もわかってないんじゃないかとか」
— アンケートによると、難しかったという参加者が比較的多かったが。

「話そのものがさっぱりわからなかったのか、話は理解できたがなじみにくい・意味がわからないのか。概念的にわかりにくいのはある程度仕方ないと思う。様々な倫理思想、加害意識の希薄さについては理解している人が多いので、まあ良かったと思う。

そもそもカルチャーセンター的に一回限りでただ面白く分りやすければいいのか、より専門的・学問的な視点を提示して考えてもらうのかは、最後まで迷って結論がでなかった。ただ前者でいくと、特に高校生が大学にはいって「だまされた」と思われると困るので(笑)。そういう迷いから、最後の『大学でこんな講義をする意味』を語ることにしてしまったと思う」

— その講義の意味も含めて、開かれた大学というようなキャッチフレーズについてどう思うか

「今回のような体験入学という形に関しては、教え方の自己チェックとしてたまにはいいかなと。ただ毎年恒例ということになると、その内容と目的はもっと考えなければならぬ。面白いところとか、分りやすい成果だけ見せてもどうだろうか。今回は特に高校生に対して、大学で学んで、知ったり考えたりする事の意味と責任を言わずにはいられなかったもので、最後にあいう話をつけ加えてしまった」

(学生編集委員：照屋 敦)

人間文化コースセミナー

人間文化コースのセミナーは、オウム騒動を契機に指摘されるようになった、「大学における『哲学』『倫理学』教育の意味」という主題で高橋憲雄先生が講義を行った。

現代社会の構造における問題点やその中で生きる人間の在り方などに触れながら、私達が哲学倫理学を学ぶことで何が得られるのかということについて語った。なかなか難しい問題ではあったが受講者（学生7名、社会人3名）は真剣に先生の話に聞き入っていた。先生はセミナーの中で「『哲学』『倫理学』は『役に立つ』知識を教えるものではないし、また『役に立つ』人間を教育形成するものではない。その意味で、『哲学』『倫理学』教育

はどこまでも無意味である。それが目指すのは、時間と自己不透明のまどろみからの覚醒を促すだけだ」と語った。

このように高度な内容であったため、受講者からは「何を言っているかよく分からなかった」「時間がもっとあれば良かった」等不満の声もあった。このセミナーは後半を討論会形式にして受講生の活発な議論を期待したが、受講生の発言はほとんど得られなかった。高橋先生の話によると「受講生に高校生が多かったのには驚いた。『哲学』『倫理学』とは大学生以上のための学問なので、何を講義しようか迷った」ということだった。これが講義がうまく進行しなかった理由らしい。

地域文化コースセミナー

地域文化コースのセミナーは日本の農業の特質に関する話だった。日本の農業は農耕狩猟が中心で、牧畜は根付かなかったという歴史的事実から、それが文化などへどのような影響を与えているかを、多くの例を挙げて説明した。

担当の佐竹昭先生によると、「セミナーの狙いは、短時間に常識を覆すような事実を提示して、それを元に文化を考えるきっかけになればと思った。」とのこと。実際に、昔の人が犬を食料にしていたという話は、受講者

にかなりの衝撃を与えたようだ。また生涯学習についての意見も聞いてみると、「複線的な生き方、考え方を身につけようということだろう。このような企画は面白いと思うが、本格的に一般の人を受け入れるとなると難しい面が出てくるだろう。私自身はすでにあちこちから頼まれていろいろやっていて、例えば東広島市文化財保護委員であるし、あちこちの自治体史の編纂や、研究成果の一般への公開などもやっているの、今は寧ろ学生への教育を考えさせて欲しい」との返事だった。

社会科学コースセミナー



社会科学コースのセミナーは水島朝穂先生が担当した。初めは「日常生活の中の法を考える」という題で行われる予定だったが、実際には「非日常生活のなかの法を考える」と変更された。

非日常というだけあって、ベルリンの壁のかけらや手榴弾、ガスマスク、ヘルメットなどが教室に持ち込まれ、受講者にインパクトを与えたようだ。講義の内容は、国連憲章と

日本国憲法第9条の違いや死刑に関する問題から、沖縄問題、地下鉄サリン事件にいたるまで、「法」に関わる様々な事例を取り上げた。受講者の反応も良く、真剣に話に聞き入っていた。

水島先生によると、「時間が短く、年齢層も多彩だったため、話題のしぼり込みを工夫した。こういう講義は、瞬発力があるものだが、内容的には割合つこんだ専門的なもの

と分かりやすくしたものとを織りまぜて、調和をとりながら話した」とのことだった。また、「広大に関係のない一般の人でも講義を聞きにきて勉強して欲しい。私の講義なら自由に聴講してもらってかまわない。私の経験からいくと、社会人になってからが学問の面白さがわかってくる。大学の4年間で学に志す人を育てる程度で良いのではないか」という意見もいただいた。

外国語コースセミナー

外国語コースは、前半と後半に分けて二人の教官が担当した。セミナー前半は谷本秀康先生の講義で、英語圏との文化の違いが、文章や言葉にあらわれたケースを質問形式で提示し、それを受講者に答えさせるというものだった。例えば、How many fingers do you have all together? 等々（ちなみに正解は8）。後半はコジマ・ルー先生の講義だった。ドイツと他のヨーロッパの国々との文化や人々の性格の相違点について、また日本人がドイツと聞いて思い出すものは何かといったステレオタイプに関する話をされた。

谷本先生によると、「セミナーでは、講師

と受講者の間に感覚のズレがあった」との感想。大学側が提供するものと一般の人が求めているものにはギャップがあるという。確かに今回、受講者の方のなかには単に知的欲求を満足させるためや充実した休日を通そうといったノリで参加された方もいたようだった。また、その点について先生は、「学外の人々に分かりやすいようにと行った講義が、大学での本当の講義を覆い隠すことになってしまう」と大学側がかかわる生涯学習、またそのアプローチのしかたの難しさについても指摘されていた。

数理情報科学コースセミナー

数理情報科学コースは、インターネット体験セミナーとなった。最初にインターネットの歴史や仕組みについての講義があり、その後操作方法などを教わった受講者たちは、それぞれ自分のコンピューターを自由に扱った。初めはやはりトラブルもあったが、先生や助手の人に手伝われて、福山大学のホームページにつないだり、ホワイトハウスのホームページにつないだりした。そのうちに皆コンピューターになれてきて、自分の見たいものを見られるようになった。

セミナー担当の間瀬茂先生によると、「数理の場合は、数式とかを持ち出してきても、一般の人には分からないだろうから、操作も簡単に楽しんでもらえそうなインターネット



にした」とのこと。実際に受講者のアンケート結果を見ると、満足したとの意見が多いようだった。しかし時間が少なくて、あまり面白くなかったという意見も見られた。また先生は、インターネットと生涯学習のかかわり方についてこう答えてくれた。「インターネットは自分で知りたいときに知りたい

情報を勝手に引き出せるという点で生涯学習の面では有効な手段となるだろう。ところが、まだ現在一般家庭への普及度は低く、一家に一台とはいかないので、一般の人が利用する機会は少ないのが実状だ。しかし、将来的には必ず重要になってくるはずである。今は大学よりも企業のほうが力を入れて研究しており、インターネットで企業の就職情報を提供

しているところもあるほどだ。それから、インターネットが普及するにつれて問題になってくることが言葉である。情報化社会ということはイコール英語社会ということであり、英語の学力が必須になってくる。実際インターネットで流れている情報のほとんどが英語である」と。このように間瀬先生は目の前でコンピューターを演演しながら答えてくれた。

物質生命科学コースセミナー

物質生命科学コースのセミナーでは、まず担当の山下和男先生が講義をされ、その後研究棟にて実験が行われた。

講義は「エネルギーの問題は政治や社会・経済・環境と深く関わっている。」という言葉で始まった。太陽エネルギーの膨大さと利用などについて述べられると同時に、広範に渡るエネルギー問題についても説明がなされた。先生は終始やさしい表情で参加者に語りかけるように説明していたのに対して、参加者側は自分から質問したりすることはなかったが、配布された資料に目を通して熱心に聞いている様子がうかがわれた。

限られた時間のため、光エネルギーが太陽電池によってどのように電気エネルギーに転換されるかなどについては、参加者の多数を占める高校生は理解し難かったようだが、次に始まる実験に対する興味を隠しきれなかった。講義ではOHPの使用のため、教

室が暗くされていたが、実験棟では、いくらか緊張もほぐれたか、楽しんでいる笑顔も見られた。太陽電池に必要な半導体の酸化チタンを作る過程で、女子高校生達はおしゃべりしながら、また、ある男子高校生は一緒になった社会人の方と、自ら院生に質問して説明を受けたりと、なごやかな雰囲気の中に知的な姿勢がみられた。そして見事実験が成功した

瞬間には拍手がおこった。またこの実験と並行して、研究棟の設備の見学も実施された。

このセミナー全体をとおして、参加者は時間の短さを残念がっていた。後での先生のお話でも、限られた時間に加え対象者が特に高校生層が多く、いくらか、研究のさわりを知ってもらい、興味関心を持ってもらうことを重視したところがあったとのこと。しかし、多くの人がこの分野に関心を示し、このセミナーを楽しんだということはまちがいないだろうと思われる。

自然環境研究コースセミナー

自然環境研究コースのセミナーでは、実際に日常行われているセミナーを参加者に体験してもらおうと、大学院のゼミの環境資源論演習をこの体験セミナーの日に合わせて行われた。東広島のアカ松林をテーマにOHPを使ってゼミ所属の院生がそれぞれ自分の研究

を発表し、その後先生が補足説明をするというかたちとられた。先生が日本語に通訳しながらの英語による発表もあり、日頃のゼミの生々しい雰囲気が参加者に伝わった様子だった。しかし、大学院の演習なので一般の人や高校生に簡単に理解できるはずもなく、受講

者の顔にとまどいの表情は隠せなかった。実際、参加者対象に行われたアンケートの結果を見ても、雰囲気は伝わってきたが、セミナーの内容はまるで理解できないという声が多かった。果たして、このセミナーの成否とその意義はどうだったのか、担当の中越先生が次のように総括してくれた。「率直に言って今回のセミナーはやる方と受講するものとの間に意識の差がありすぎて、手ごたえは感じられなかった。例えばセミナーの対象者を主に地元東広島市民と考えていたのに、実際に来たのは、広島市内のインテリと環境ブームに乗せられた高校生ばかり。東広島市民に身近なアカ松林の話もその住人がいないのでは

意味がなかった。しかも、セミナーというのは共同研究による専門的な学問の場なのだから予備知識の無い人がいきなり参加しても分からないのは当然で無理もない。我々もセミナーはこういうものだと割り切るしかなかった。広島大学も広島市内にいた頃は、主に知的欲求を満たす方向でこのようなセミナーを開けばよかったかも知れないが、元々は農村であった東広島市に移転してからは同じ様にはいかならないのではないかと。むしろ広大なキャンパスを市民に開放し祭やイベントを催し、家族連れで楽しめるような大学行事にした方が、この地域のニーズに合っていると思うのだが……。」

生体行動科学コースセミナー

生体行動科学コースセミナーの担当教官は浦光博先生。学部公開の行われている教室でコース内の3つの群について簡単に説明した後、コース実験室で「人間と集団」のセミナーとなった。内容は、お互い暖め合おうとして近づきすぎると傷つけ合ってしまうというヤマアラシの寓話から始まり、集団の機能、個人に及ぼす影響などをスライドやビデオを交えて説明、ストレスや燃えつき症候群などの社会的な精神病理へと進展した。

参加者は他のセミナーより多く15人で、一般社会人・主婦の方が多かった。皆さん熱心に説明を聞き、活発に質問していた。参加者からは時間が足りなかったという不満が多かったが、先生は社会人の方の話も聞けて、活発な議論に満足したようだ。セミナーの内容は、一般の人が多いことから職場や家庭の人間関係を中心に、市民講座の感覚で話したとのこ

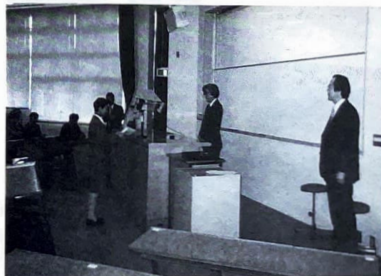
と。実際、参加者からは生徒の不登校から夫婦の家事分担まで、様々な社会問題について質問が飛び出した。

セミナーでは年配の方が特に意欲的だったので、先生に生涯学習と大学の在り方についても聞いてみた。「生涯学習は大賛成。そのためのこういう機会は非常にいいと思う。これは一般の人への啓蒙ではなくて、学問や知識を共有していくための大学側の責任ではないか。逆にこちらも目を開かされることもある。総合科学というのも、他分野の成果を一つの分野のために利用したり、単に総合のための総合ではなく、現実的な問題に対処するための総合でなくてはいけない」

今回の企画を取材して

インタビューによると、参加者との活発な議論に満足した教官もいれば、一般生活にはなじみのない専門の学問をどのように講義するか、苦労した教官もいた。

今回は特別企画だったが、これを契機にぜひとも続けて欲しいという意見が多く、参加者にはおおむね好評だったようだ。しかしそのためには、知識の差や意識の違いを乗り越えて、大学と一般の人たちがお互いに刺激しあえるような方法を熟慮しなければならないかも知れない。(学生編集委員：三輪誠一郎)



心のオアシス

学生相談室があなたを待つ

総合科学部M棟、いわゆる事務棟の階段を上り3階へ行く。あるいは、研究棟A棟の2階から事務棟へ行く。すると「学生相談室」という部屋がいくつか並んでいる。これらの部屋を知っている人もいるだろうし、知らない人もいるだろう。今回、謎に包まれたこの部屋を学生編集委員が直撃レポートする。

まず、受付の部屋がある。ここには事務員のお姉さんがいて、ソファとテーブルも置いてある。我々はこの受付を通して取材を申し込んだ。すると、すぐにカウンセラーの岩村先生のところへ通してくれた。

「今日は本当なら来るはずの人がまだ来ないようだから、少し話をしましょう。」

そう言って、カウンセラーの岩村先生は我々の取材に応じてくれた。我々学生編集委員は統合移転に伴い、学内の施設を見直す意味でこの学生相談室を訪れたのだが、何とすでに先客がいた。

「『広大フォーラム』27期1号に、この部屋の記事が書いてあるんですよ。毎年、この時期には広大フォーラムでこの部屋を扱ってます。数年前にはトップ記事にもらったこともあるんですよ。」

何と、ライバル？の広大フォーラムに先を越されていた！ しかも毎年！ だが悔しがっている暇はない。ショックにもめげず、我々は取材を続けた。

「昨年度は、カリキュラム改定に伴う06生の相談が非常に多かった。そこでそれらの意見を取り入れ、各学部にて07生用のガイダンスを改良すると言ったんですよ。なかには法学部のようにほとんど改良しなくてもよい所もありましたが。」

このような相談も受けているのか。我々は少し意外な感じを受けた。総科生の相談の特徴について聞いてみたが、先生は何だろう、と考え込んでしまわれた。

「昔は『何をすればいいのか』という悩みが多かったんです。学部を選ばなくていいというモラトリアムを求めて入って来た学生が、コース選定に当たって再び悩むというパターン。この部屋が主催したシンポジウムも開か

れ、学部の教官や事務を集めて『いいことばかり広告に載せて、総科はウソツキだ』といった激しい議論を戦わせたこともあります。また、設立当初は学生の意識調査も行いました。どういう考えで総科に来たのか、とか。最近では特に目立つ悩みはないが、人づてに来てとにかく話を聞いてもらうという例が多かったんですよ。」

総科生の団結性の強さを示す例かもしれない。

「そもそも、設立の目的は『学生の自己確立の一助となる』という事なんです。我々のところに相談に来ることによって、聞いてもらうことで悩みを整理できる、必要ならば助言を受けることができる、というわけです。」

なるほど。学生は人間がだんだん一人前になって行く「激動の時代」にある訳だから、悩みも当然多いわけだ。「ところが、公務員の実定削減政策の影響でカウンセラーが2人から1人に減ったんです。今では非常勤の先生を入れてもらっていますが、それでも本当は足りません。しかし、公務員を減らすという政策に反発する気はありません。それは必要なことです。我々は足りなければ足りないの戦略を考えています。Consultationと我々が呼んでいるのです。」



相談の様子（再現映像）

つまり、学生が周囲の人々と連携するように仕向けていく事なのだ。例えば、授業の一環として学生の自己確立の一助となり得るような内容を扱うとか、チューターがもっと親身になって学生と接触することに努めるとか（ちなみに、昔はチューターが中心になって相談室をやっていたらしい）といったことである。これなら相談室の仕事にも少し余裕が出て来る。こういう仕事は、一人一人にじっくり時間を取れば取れるほどよい結果が出る。それを考慮しない一律的な人員削減（お役所だなあ）は問題なのではないか。

「それとほら、学部の保健室がなくなっちゃったでしょ？」

えっ、そうなんですか？

「統合ということで、全部保健管理センターに吸収されちゃったんですよ。これまでは保健室に一人の看護婦さんがいて、機密性が保たれていた。だから学生が相談に行きやすかったんです。でも、統合されて広い部屋に数人の看護婦さんがいる態勢になっちゃったから、学生としては行きにくい。こういう意味で、一律的な統合は果たして有効なのか。疑問がわいて来る訳です。」

そういえば、保健管理センターの心理相談室と学生相談室はどう違うんですか？

「特に違いはないんです。別に心理相談室だからといって、心理相談以外の相談は受け付けないという訳ではありません。ただ、二つあることで学生がこぼれて行くのを防ぐことができる。相談を受ける我々と学生の相性が悪いと、ちょっとしたことで来にくくなってしまふことがある。そういうとき、こっちがだめだったからあっちにしよう、という選択の余地が残されている。これは大きいと思うんですね。」

なるほど。人の心はスパッと切って割れるような単純なものではないから、不合理に見えてもかえってそれが合理的なのだ。学内で増えているという自殺も、この学部保健室の廃止が大きな影を落としているのではないかと一部の関係者はみているようだ。

人生に悩みは付き物だ。困ったときには近くにいた友達や先輩、あるいは教官に相談するのがいいだろう。一人で抱え込むのはよくない。あるいは誰にも言えない悩みがある、という時には、この学生相談室を訪れてみてはいかがだろうか。この取材ではしゃべることのできる最大限のことをしゃべってもらったが、個人の悩みについては秘密厳守が鉄則である。プロとして冷静に相談に乗ってくれるだろう。金曜日の4コマ後には、学生に広く開放されたオープンフライデーという時間が設定されている。また、土曜日には社会人や卒業生も含めて開放された土曜友の会も開かれている。別に相談を受けていなくても、これらの集いには誰でも自由に参加できる。学生相談室は、どんな学生でも受け入れる「学生の味方」なのだ。

（学生編集委員：渡辺忠信、野田忠幸）



市と大学を結べば

富 吉 邦 彦 (東広島市議会議員)



ことに、重ねてお祝いを申し上げます。

ご承知のとおり、東広島市は昭和48年の広島大学統合移転の決定を契機として、賀茂学園都市づくりの推進を中心に据え、「飛翔」を拝見させていただきますと、総合科学部も昨年20周年を迎えられたことであり、同様に昨年市制20周年を迎えた本市としては、いわば同級生と言えるかと思います。

のどかな農村地帯で、都市的な社会資本は皆無の状態から都市づくりをスタートしました本市においては、この20年間で、国の事業そして県、市の事業を合わせた投資額が、4,500億円を超えるとも言われており、このように集中的な投資が行われた街は全国でもあまり例がないのではないかと思います。

人間に譬えれば成人式を終えたとはいえ、都市基盤、生活基盤は、まだまだ脆弱、未熟であり、より一層の努力が必要とされるときにも、これからがいよいよ都市づくりの正念場であると思っております、他の国立大学には例のない広島大学の看板学部の一つとして成長してこられた総合科学部と、今後、共により成熟した大人となるよう頑張っております。

ちょうど二年前になりますが、一昨年の12月に学園都市づくり交流会議により「アミューズメント機能調査」がなされ、その報告書が出されております。

都市づくり交流会議は、大学と地域、企業そして行政等が様々な交流を通じて、東広島市の学園都市としての文化の創造を考えていくことを目的に組織されたものですが、この

調査報告書では、広島大学と近畿大学工学部の学生のニーズ調査を取りまとめたものであり、その内容を要約すれば、両大学生にとって、東広島市での生活は快適なものではないとの結果となっていたように思います。

この結果は、「そうかも知れないな」と思う気持ちも少しはあるものの、我々地方自治に携わる者としては、やはり、愕然としたというのが正直なところであります。

成長力が全国の都市で第3位という東洋経済の調査結果も出ておりますが、一般的に急成長している都市においては、基盤整備をはじめ市民ニーズの多様化等、どうしても行政課題が多いのが現状です。こうした中において、それぞれの解決を図り、ハード、ソフト両面での整備に全力を挙げて頑張っているのに……、という気持ちが強くなるのです。

しかし、こうした意見は現実のものとして甘んじて受け、学生の皆さんのみならず、全ての市民が、この街に住んでいて良かったと思えるよう、今後は成熟化した都市をめざして、より一層の努力をしていかなければならないと考えます。

こうしたものとしては、大学近隣の下見学生街の整備をはじめ、西条駅前の整備、広域交通網の整備そして公共交通、中高教育機関、総合医療機関の充実等、多くの課題がある訳ですが、これらの早期実現に向け、一步一步着実な推進を図ってまいりたいと思っております。

さて、本市は、賀茂学園都市建設とそれに加えてテクノポリスの建設を中心に都市づくりを進めてまいりましたが、特に、平成2年の頭脳立地法の指定後は、その中心となる広島中央サイエンスパークにおいては、官民の試験・研究所等の立地が進んでおり、試験研究機関とともに、新技術の開発拠点としての機能も着々と整いつつあり、加えて、JICA及び広島県による複合的な国際人材育成施設の建設が進められているところであり、総合的な国際人材育成の拠点としての機能整備も

図られようとしております。

このように、本市は、今後の都市づくりの一つの基本目標としている「国際学術技術研究都市」の形成に向けて変遷しつつあると言えます。

昨今、インターネットという言葉に、新聞をはじめ様々なメディアを通じて触れることが多くなっており、地方自治体においても、このホームページが設けられつつあり、企業の求人についても、これを利用して行われる状況にもなっております。

すでに、広島大学内においては、独自のハイネットが設けられ、インターネットとともに接続されていると聞いておりますが、これを大学内だけでなく、サイエンスパーク内のLANをはじめ様々な研究施設との科学技術情報ネットワークの構築がなされれば、産・学・官の協力のもとに、学術研究交流が推進されるとともに地域型COEの形成も促進され、中・四国における情報発信拠点として、国際学術技術研究都市の形成にもつながっていくものと思います。

このようなことを考えながら、東広島市に行けば、世界の先端技術と頭脳が揃っている広島大学や研究機関があり、そこではいつでも自由に共同技術開発ができ、最新の情報が得られる、そんな21世紀の市の姿を頭に描いているところです。情報化で思い出しましたが、一般放送された、NHKの番組「パソコンで政治を変える」の中で、地方自治体の議員の職務は何だと思ふかとの質問に対して、大学生が、「結婚式の祝電を打つ」、「葬儀の弔電を打つ」のが仕事のように答えていたのには、いささか驚かされました。

無党派層の増加をはじめ政治不信の風潮が高まり、政治への信頼回復が今盛んに叫ばれているところであり、選挙を例に挙げても、その投票率の低下には著しいものがあります。誰を選んでも世の中は変わらないとの思いがそうさせるのか、自分には関係のない世界のことだと思われているのか、よく分かりませんが非常に残念でしかたがありません。

昨年4月の統一地方選挙では、東広島市においても市議会議員選挙が行われました。定員30人に34人が立候補するという小数激戦で

ありましたが、その結果、新人議員が7人、2期議員が8人ということで、大きく人身の一新がなされたところです。

こうした議会構成の中で、議長として私は、「開かれた議会」と「市民に理解できる物事の決定」を公約し、市民の政治への関心を高め、市民に密着した議会運営に努力していきたいと決意を新たにいたしました。

これからの東広島市を考えますとき、広島大学という存在を外して考えることはできません。

大規模プロジェクトの推進が一段落し、都市づくりの第2ステップを迎えている本市は、「自然と人間の調和のとれた学園都市」の実現を目指し、前述のとおり、これからは、学生を含めた市民の皆さんが魅力を感じる街づくりを真剣に考えていく時期にきていると思います。

そのためには、市民、大学、企業そして議会を含めた行政が連携し、一体となつてともに本市を真の学園都市に育てていく、そんな「育都」の意識をそれぞれが持ち合わせていくことが必要ではないでしょうか。

是非とも、広島大学からも議会に出ていただき、共に都市づくりに携わっていただく日のくることを期待申し上げますとともに、機会をとらえて、大学の先生方や学生の皆さんと意見交換などをさせていただければ幸いと思っております。



一緒に「まちづくり」をしよう

「まちづくり曼荼羅」の中心を埋める双方向システム確立のための提案

上 向 隆 (東広島リビング新聞社編集長)

1. はじめに／人の心を情報で結びたい

表層はともかく、この地域に住む人々の心に外面的なドラスチックな変化に対応しきれない実情が存在します。日々変わる郷土の外観、都市化する町並みや崩れさる山々、そして希薄化する人情、それらが人口の増大に伴ってますます心を困惑させています。

東広島市は昭和49年の市制施行以来、広島大学などを核とする研究学園都市として表面的には発展の一途をたどっています。田園地帯から県の中核を担う都市へと変貌しつつあり、現に学園都市構想に基づく基盤整備事業が着実に進んでいます。しかし、研究学園都市の実態は多くの市民にとってはよくわからないものがあり、市民の大学、学生や教職員などへの対応はいまだに混乱があります。

高齢化、高度情報化、そして地方化の流れの中で、この地域でも時代性を感じつつこの困惑に立ち向かうさまざまな取り組みがなされていますが、現時点ではこの解決の糸口を「情報」に求めるのが一つの方法だと考えられます。学園都市、テクノポリスを両輪に都市化が進む東広島で、市役所に代表される行政と、「まちづくり」に取り組む市民や市民グループ、大学との接点は「情報」のやり取りを通してのみ可能だからです。

2. 「まちづくり情報センター」の必要性

地域社会に住む人々にとって自分たちの町を住み良く、明るく希望にあふれるものになりたいというのは当然です。そのための行政であり、市民活動なのですが、現状の情報発信は行政、市民とどちらかというと一方的な観が否めません。市当局の広報公聴に関する認識度はいまだに低く、また市民も、そして大学も学生・教職員も自分たちの活動を広く知らせるシステムチックな術を知りません。

地域の人たちのダイナミックな情報を地域



で共有するため地域新聞、有線放送、CATV、ミニコミなどの役割は当然あります。しかし、マルチメディアの代表と目されるインターネットが日本でも急速に根を下ろしつつあり、地方と中央の情報格差が根本的になくなるような状況の中では地域としても情報に対する新しいスタイルが求められており、情報を中心とした「まちづくり」を言葉だけでなく実のあるものにする努力が必要です。

これらを実現するための基本的条件の一つは、活力ある人材を生み出すことです。活力人材とは、仕事や人生に「誇りと生きがいを持っている」人のことで、活力人材が増えることが地域の課題解決のすべての糸口になります。「まちづくり」の理念に沿った考え方の共有・共感のため、一人では限界のある建設的な独創性を「共創」に転換していくプロセスをシステム化する努力が求められます。

その地域にとって、今何が大切で、何が求められ、それをどういう情報に整理し直していくかが重要です。特に、人口10万人程度という「FACE TO FACE」の可能な人口的に「ON SCALE」の今しかこの接近はあり得ません。地域で発信されるさまざまな情報は、現時点ではまだまだ「点」でしかなく、これを「まちづくり情報センター」において双方向にするべきである、と強調したいと思います。

東広島市は現在も学園都市、テクノポリス建設の途上にあり、ハード面の整備はまだま

だ進んでいくでしょう。こういった中で、市制施行以来ここに移り住んだ新住民とそれ以前の旧住民との新たな関係づくりに本当に役立つ情報を収集、整理して各層へ送り出す役割を「まちづくり情報センター」が担えるはず。また、今後とも移り住むだろう大学や研究諸機関などにかかわる新住民との関係も情報という枠組みの中で「まちづくり」という曼荼羅の中心を埋める都市プランの創出は、点として活動している行政、市民、そして大学や企業を情報で結ぶ「市民ネットワークづくり」のことなのです。

3. 終わりに／大学と地域との共同を

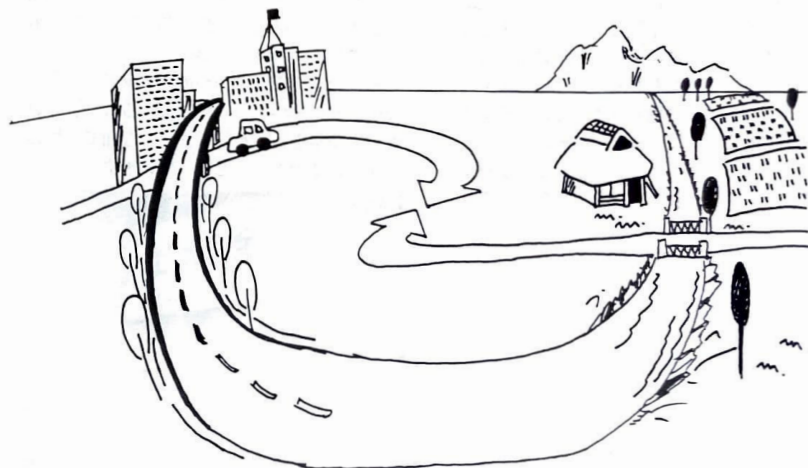
「まちづくり」では、大学の役割は大きいものがあります。地域に開かれた大学を標榜する広島大学であるなら、もっと積極的に地域とのかかわりを模索してよく、それには地域と大学との共同事業の推進が一つのテーマです。例えば、東広島ならではの自然や景観・人・施設・歴史文化などのあらゆる環境をこの都市の社会資源として十分に活用した魅力づくりのための全市民を対象とした「東広島型の環境教育プログラム」の開発があります。この提案は、自然と共生するための「まちづくり」の手法のことであります。

東広島市では教育委員会を中心に現在「環境教育」を推進（文部省指定事業）していま

すが、残念ながら各校（協力実践校）の取り組みはいまだ全般的なものとはなっていません。各校の環境保全などへのアプローチを地域全体にどう位置付け、どう市民に理解を得るか、またどういう地域展開が可能かを考えるべきだという課題が残っています。この課題解決のため、行政と市民、そして大学が共同で環境教育プログラムを開発しようという提案で、これは地域全体の課題としても十分なものがあります。

この地域に住むという共通点は何よりも明白で、住む以上はこの地域を少しでも良くしたいという明確な意志を持ってそれを具体化したいと思うはず。発展一方だった「まちづくり」を調和の方向にも向かわせ、発展と調和のバランスの大切さを目に見える形で教えることは、大人と子どもとのバランスを取ることもできます。

大学がその専門性を十分に活用して身近な自然環境を子どもの遊びと学習、発達に正しく位置付ける「環境教育」は、身近な自然環境をくつろぎの資源ととらえる「感性教育」にもつながります。自然環境を心の原風景を支える資源ととらえ、心身共に健全な子どもを育て「まちづくり」は子ども一人ひとりを花にたとえたフレーベルのKindergarten（子どもの園）が地域に広がることです。環境教育プログラムの提案と開発は、地域と大学との新しい展開の始まりの一つと確信します。



「私と中国語」

社会科学コース3年 佐々木 美保

(第13回全日本中国語弁論大会全国大会優勝、日本中国友好協会会長賞受賞)



大学1年生の時、第二外国語として選択したのが中国語との初めての出会いでした。その時は別にこれといった理由はなく、ただ漢字なら親しみがもてるかもしれない、といった

安易な理由から中国語に決めました。発音の難しさに四苦八苦しながらも、授業に何とかついていこうと一生懸命頑張ったのを覚えています。そうした中、私の心の中で決定的な意味をもつこととなる一冊の本に出会いました。それが、ご存じの方も多いと思いますが、「大地の子」だったのです。言葉はもちろんの事、中国の文化も歴史もほとんど知らなかった私にとって、本の中にも取り上げられている「文化大革命」はまさに驚きであり、「なぜ？」という気持ちばかりが湧き上がって来ました。このことがずっと心に残り、やがて「もっと深く知りたい」と思うようになり、これがきっかけで「中国」に興味を抱くようになったのです。

今年の夏休みには、一カ月という短い期間ではありましたが、中国に留学することができました。今回は語学研修ということで行ったわけですが、私はむしろ、自分の目で中国を見て、中国文化に触れる事こそが、留学の主目的だと思っていました。その中には、日本人からしてみればびっくりしてしまうようなこと(店員の接客態度など)や、どうしてもなじめない習慣(歩行者の道路横断方法など)がたくさんあり、日本という狭い世界しか知らなかった私にとって、見るもの聞くものすべてが新鮮でかつ刺激的でした。

今回は、中国語弁論大会という、自分の力を試す絶好のチャンスが与えられ、それなら是非中国留学の事を話そうと思い、参加することに決めました。発表は「二つの出来事から」という題で、私が実際に中国で体験した二つの事から、自分なりに感じたこと、考え

たことをそのまま話す事にしました。その出来事とは、一つはタクシーに乗っていた時に、運転手さんの言った「僕は日本人を信じているよ。」という言葉。しかし、彼は続けてこう言ったのです。「日本人は他の外国人と違って、料金をきちんと払う。だから日本人は好きなんだよ。」二つ目は、私達が汽車で旅行に行く途中、ある一人の老人に「お前は、昔日本軍がこの中国で何をやったか知っているか? どうして日本の政府は素直に罪を認めないんだ。」と言われ、何と応えたらいいのかわからず、返事に困ってしまった事。私はこの2人の言葉がどうしても忘れられず、ずっと心のどこかにひっかかっていたのです。中国は今、急速な発展を遂げており、貿易等の経済面において、日本と中国はお互いがお互いを必要としあう関係の中にあると言えるでしょう。しかし、真の日中友好と言った場合、果たしてそれは実現されているのでしょうか。「利潤」と「プライド」とが両国の間に大きな壁を作ってしまったのではないのでしょうか。戦後50年たった今、政府ではなく、今度は私達個人が中国との関係を真剣に考えて行くべきだと思います。私達一人一人の力はあまりにも小さく、日中友好と言うには程遠いと感じるかも知れませんが、そうして初めて、本当の意味での友好関係が築き上げられるのではないのでしょうか。

私は今回の受賞を一つのステップとして、日中友好の一つの架け橋になれるよう、これからも語学をはじめ、さまざまな面で中国に目を向けて行きたいと思っています。



「大学生第2回懸賞論文 —21世紀のエネルギー・環境問題を考える— に入選して」

生物圏科学研究科博士課程前期1年 山西 敏道

平成6年の夏休みの初め、僕はとても悔しい日々を過ごしていた。自分が8月下旬の大学院入試の勉強に明け暮れて(?)いる中、同じ早瀬研究室に所属している先輩の赤井さん(当時M1)が財団法人中国地域エネルギーフォーラム・株式会社中国電力主催の懸賞論文に入選して、何とヨーロッパ旅行に行くというのだ。そして、旅行から帰って来た先輩からお土産を頂き、写真を見せてもらいながら旅行の感想を聞いた時に、「来年は必ず俺がヨーロッパに行ってやる!」と心に固く決意したのであった。大学院生になり、懸賞論文は締め切りギリギリに提出した。その懸賞論文のテーマは「21世紀のエネルギー・環境問題を考える」であり、3つのサブテーマから「ライフスタイルをどう変えるか」を選択した。というのも卒論で取り組み、大学院での研究目的でもある環境監査(企業などの社会システムの環境負荷を減少させるシステム)が、ライフスタイルの改善に非常に有効なのではと思っていただけだ。6月になり、入選したことを知らされた。「憧れのヨーロッパに行けるなんて!」と思わず興奮してしまった。表彰式は広島市内のホテルで行われ、がらにもなく緊張してしまった。

8月20日、僕は関西空港にいた。今まで一度も日本を出たことのない自分にとっては、不安もかなりあったが、「せっかくヨーロッパに連れて行ってもらえるのだから、積極的にいろんな人に話しかけてみよう。」とポジティブ思考に切り替えた。ルフトハンザ航空の機内で、眼下にロシア大陸が見えた時は、ほかのメンバーとともに思わずはしゃいでしまった。フランクフルトに到着したのは夕方であった。その夜、さっそく地元の飲み屋に出掛けた。次の日はハイデルベルクに行き、ハイデルベルク大学の学生達と夕食を共にしながら親交を深めた。学生と言っても自分達よりかなり年上の人が多く、本当に

勉強を大切にしているのだと感じた。3日目はミュンヘンの省エネルギーカウンセリングセンターを訪問し、その取り組みなどを説明してもらった。スイスのチューリッヒに飛んだ4日目は、テクノラマという科学施設を見学した。そして5日目の午後にはパリにいた。ドイツ・スイスと回ったことでヨーロッパに慣れた気分になっていたが、パリは他の都市とは質的にも規模的にも比較できないほど文化が華やかで、「さすが芸術の都だ!」と見とれてしまった。その夜にはセース川クルーズに連れて行ってもらい、とてもロマンチックな時間を過ごせた。今回の旅行のメインイベントである、ノジャンシュール原子力発電所には6日目に訪問した。説明や案内を受けて「地域と密着した原発なんだなあ。」と思ったが、その安全性を確信しているのには驚いた(その日、二つあるうちの一つの原子炉が故障して運転停止していたのに)。原発の中を案内してくれたフランス人の方はとてもフレンドリーで、二人でF1(モーターレース)の話で盛り上がり続けた。7日目には午前中、ラ・ビレット科学産業都市を見学し、午後は自由行動となった。4人でパリ市内を周り、オルセー美術館やエッフェル塔を見学した。ルーブル美術館に行ったのは8日目である。ミロのビーナスやダ・ヴィンチのモナリザを見たのはとても幸せだった。その日の午後にはイギリスのロンドン塔を観光していた。そして9日目の夕方、ヨーロッパから日本に向けて飛び立った。今振り返ると、「あっ」という間の10日間だったが、自分にとってかけがえのない体験であった。今回の旅行を楽ししてくれたメンバーや添乗員、引率者の方々に深く感謝し、これからますます頑張っていくと思う。最後にこれを読んで興味をもった方は、ぜひ来年の懸賞論文に応募して下さい。



上段中央が筆者